

大東アレル帳

(6)

河内ことば

「ふるさとの、訛(なま)り)なつかし」と啄木がうたい、「言葉は国の手形」といわれるように、人々の生活や経験から言葉が生まれ、その土地で長い間かかって育てられたのが方言です。

「河内ことば」といつても、八尾や東大阪は大和弁の影響をうけ、枚方・交野の言葉に、京都弁の色が濃いのは、地理的・歴史的にも当然でしょう。大東の方も、この両方と大阪弁の混り合った言葉と思われるが、今日、純粋の河内ことばを聞くことは、たいへんむづかしいことです。

昭和三十三年、大東に越して来て間もなく、ある会合で地元の方たちが「ウタトイ話や!」「そんな事ア

ライン。インキョのアンニ

「アライン」はありはし

「ソララッカ。デキヤ

インやろけどタノンマッ

「サ」などと話されているの

を聞き、言葉の奇異さに驚

いたことを覚えていきます。

「ゴメンヤス。マイド!」

「ようオコシ。まあコッチ

「オオキニ。ほんまにヌク

ウてええオヒヨリサンでん

なあ!。アンバイどうだす

「もうサブイ事ないよ

つて、ひざ痛もましですわ

。うちのヨメハン、ちょ

つとカイモンにイッコリマ

シテン。チットマしたら帰

るよって、ブブなどドウ

「アリガトサン。セエ

テセカン用ダッサカイ、ま

た寄りマッサ!」先日、仕

事で伺ったお宅のおばあ

ちゃんとの私の会話です。

「アライン」はありはし

ないとの語が、アリハセン

「ソララッカ。デキヤ

インやろけどタノンマッ

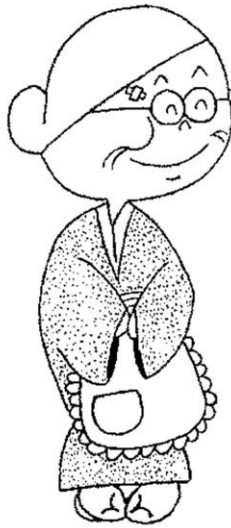
た水のような温かさが感じられます。ただ、方言は文章に書くと読みづらく、まじりに蓄くと読みづらく、また言葉のアクセントが表わせないから、ニュアンスも伝えないから、知らない人には注釈も必要です。共通語が叙述の言葉であるのに対して、方言はあくまで対話の言葉といえましょう。

最近、言葉の特性は急激に失われつつあります。テレビなどのマスコミ文化

や、人々の広域交流、それよりも、忙しくて省略を余儀なくされる、現代社会の現象でしょうか。

地域性の尊重をいわれながら、教育や文化、言葉など、ともすれば画一的になりがちな現在、せつかく守り育てられた方言のよさを直視することが、地域性を高める一助になるのではないのでしょうか。

(文・酒井昭子)



ええオヒヨリサンでんなあ……

